

研究報告

# コロナ禍における小児看護学実習の代替実習での工夫や 学生の学びに関する文献検討

清水 史恵\*

## 要旨

【目的】 文献検討により、コロナ禍における小児看護学臨地実習の代替実習での工夫や学生の学びについて概観し、代替実習の現状や課題を明らかにする。

【方法】 医学中央雑誌WebとCiNiiを用い、2020年1月から2022年10月の期間で、「小児看護学実習」をキーワードとして検索し11文献を対象とした。文献を読み、代替実習の工夫や学生の学びの記述を抜粋しコード化し、代替実習の工夫と学生の学びに分類したうえでコード間を比較検討し、カテゴリー化を行った。

【結果】 代替実習の工夫として、リアリティの生成、イメージ化、自ら学び取る機会の提供、思考力の醸成、学生同士の学び合いの活性化、学びの視点の共有、行き詰らないための配慮が見出された。学生の学びとして、子どもの成長発達や疾患をふまえた看護、子どもへの倫理的配慮、子どもの療養環境、チームワーク、看護過程、臨地実習と遜色ない学びが見出された。

【結論】 教員は、代替実習において、臨地実習のようなリアリティを作り出し、学生が行き詰まらないよう配慮しながら、実習目標に到達できるよう、個別に支援するとともに、学生同士の学び合いを活性化できるように関わる必要がある。

Key words : 小児看護学実習、代替実習、実習指導、文献検討、学び

## I. 序論

近年、少子化による小児病棟の閉鎖や、看護師養成の教育機関の増加に伴い、小児看護学実習の臨地実習施設の確保が困難となっている。厚生労働省（2015）は、「母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について」の通知において、病院以外にも保育所や小中学校、保健センター、社会福祉施設等での実習を含めることができるとした。その通知を受け、小児看護学実習

は、小児病棟での実習をはじめ、小児科外来やクリニック、保育所、幼稚園、障害児施設など様々な施設において実施されてきている（山内ら、2017；秋田ら、2019）。

2020年頃より、新型コロナウイルス感染症が流行し、病院や保育所等での臨地実習が中止となり、実習内容の変更や工夫を各教育機関において手探りで行わなければならない状況が生じた。日本看護系大学協議会による調査報告（2021）で、小児看護学実習の臨地実習が80.2%の大学で中止となり、67.8%が遠隔授業形式の実習に、83.7%が学内実習に変更となり、実習目標の到達状況として

\*京都看護大学看護学部

技術や態度が臨地実習時から下回ったと報告されている。小児看護学実習で、子どもの模擬患者がいないことで、「子どもが嫌がることへの対応」「子どもの多様性の理解」「発達障害の子どもの理解」「成長発達個性性に合わせた対応やケアの実施」「子どもの尊重」「特徴をふまえた倫理的行動」「安全に配慮した環境整備、関わりやケア」の不足があり目標の変更を行ったこと、教員や学生が子どもの模擬患者になるには限界があったとも報告されている(日本看護系大学協議会, 2021)。一方で、小児看護学実習の代替実習で様々な工夫がなされていることや、それに伴う学生の学びについて報告されている。今後も、臨地実習施設での実習が困難となることが予測されるため、これまでの研究から代替実習の工夫や学びの現状および課題を明らかにし、今後にかすことが必要である。

## II. 目的

コロナ禍で臨地での小児看護学実習が不可能となった際の学内実習やオンライン実習などの代替実習についての研究報告をもとに、代替実習での工夫や、それに伴う学生の学びを概観し、小児看護学実習の代替実習における現状や課題を明らかにする。

## III. 方法

### 1. 文献収集の方法

日本における小児看護学実習に焦点を当てたため、和文献に限定して文献を収集した。データベースは、医学中央雑誌Web、CiNiiを用いた。新型コロナウイルス感染症が流行し始めた2020年1月から2022年10月を検索期間とし、「小児看護学実習」をキーワードとして検索した(検索日: 2022年10月2日)。医学中央雑誌では会議録を除き59件、CiNiiでは52件がヒットし、会議録や重複する文献を除き71文献を収集した。研究目的に該当するように、実習内容の記載のみで学生の学びの

記載のない文献や統合実習に関するものは除き、小児看護学の領域実習に関する文献に限定した。コロナ禍における小児看護学実習の代替実習として学内実習やオンライン実習の工夫や学生の学びの記述があるかについて確認し、最終的に11文献を対象とした(表1)。代替実習の全体を概観するため、学内実習、オンライン実習、学内実習とオンライン実習を併用した実習、これら全ての方法を代替実習として分析対象とした。

### 2. 分析方法

文献を何度も読み、代替実習の工夫やそれに伴う学生の学びに関する記述を抜粋し意味内容を損なわないようコード化した。コードの内容から、代替実習の工夫と学生の学びに分類したうえで、それぞれの類似性や相違性から比較検討し、サブカテゴリー、カテゴリーを見出した。

### 3. 倫理的配慮

文献検討の対象とした文献において示された知見を引用する場合、出典を明記した。今回の研究で明らかにした知見と明確に区分し記載した。

## IV. 結果

### 1. 文献の概要

対象とした11文献の研究デザインは、量的研究2件、質的研究5件、量的研究と質的研究の併用2件、実践報告2件であった。

### 2. 実習内容と学生の学び

#### 1) 新型コロナウイルス感染症流行後の小児看護学実習の形態

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、小児看護学実習をオンライン実習に変更が4件、学内実習に変更が5件、オンラインと学内実習の併用への変更が2件であった。10件は小児病棟実習の代替実習で、そのうち9件は、教員が提示した事例患児を学生が受け持ち看護過程を展開する実

コロナ禍における小児看護学実習の代替実習での工夫や学生の学びに関する文献検討

表1 文献の概要

文献番号	タイトル	著者	年	掲載誌	新型コロナウイルス流行前の小児看護学実習の内容	新型コロナウイルス流行後の代替実習の内容	研究方法
1	シミュレーション演習を交えた 臨地実習の教育的意義- 2020 年度小児看護学実習を終えて-	木戸 美佐子, 真田 英子	2020	群馬医療福祉 大学紀要, 9, 97- 104.	病棟、重症心身障害児施設、 幼稚園の3施設で2週間実習	学内実習2週間 1週目は、小児科外来、重症心身 障害児施設、幼稚園の3施設の概 要を理解するプログラムを実施。 2週目は、教員作成の川崎病の事 例を学生がベアで受け持ち、バイ タルサイン測定や症状観察のシ ミュレーション演習を2日間実施。	シミュレーション教育の取り組 みについて、授業のカンファレン スや最終発表会での学生の 発言感想などについての教員の 記録物からデータ収集およ び分析
2	新型コロナウイルス感染症拡大 防止に伴う学内実習の効果と 課題 -小児看護学実習-	東出郁子, 西澤恵美子, 原恭子, 萩原美幸	2021	神奈川県立よこ はま看護専門 学校紀要, 13, 64-69.	病棟実習7日間と保育園実習 4日間	学内実習2週間 川崎病とネフローゼ症候群の2事 例を実習グループ内で学生が均 等に受け持ち、看護過程を展開。 DVD視聴やロールプレイ。	学生6名の実習記録(学びのレ ポート)から、実習の学びの記 載箇所を抽出し、カテゴリに 分類し分析
3	学内実習プログラムで実施した 小児看護学実習における学生の 学び	田中さおり, 伊織光恵, 日沼千尋	2021	天使大学紀要, 21(2), 15-31.	病棟実習を学生の希望に 応じて1週間もしくは2週間	オンライン実習7.5日間 紙面事例の看護過程の展開、看 護技術に関する課題として各事例 に必要な看護技術の考案を学生 に課す。グループ内学生は同じ事 例を受け持つ。 電話で学生への個別指導、カン ファレンスはZOOMで実施。	小児看護学実習における学び について学生39名への質問紙 調査と学生61名の実習レポー トの質的分析
4	オンライン小児看護学実習に おける実習指導の現状と課題 with COVID-19: 授業評価 スケールを用いた遠隔実習の 予備的調査	岡保由美子, 柳下圭代, 角田はる美	2021	白鳳短期大学 研究紀要, 16, 101-112.	病棟実習5日間と児童福祉施 設(保育所実習・児童養護施 設)実習5日間	オンライン実習5日間 小児病棟をイメージできるオリジ ナル映像の活用。 病名や発症段階が異なる3事例を 使用し、看護過程の展開。 オンラインで情報提供、看護計画 に基づき実践。	学生102名を対象とし授業過程 評価スケール看護学実習 用一を用いた質問紙調査を行 い、舟島らの調査から抽出され た総得点および各下位尺度の 項目平均得点と照らし合わせ て評価
5	コロナ禍における小児看護学 実習の成果と課題	岩佐有子	2021	京都看護, 5, 67- 75.	病棟実習10日間	オンライン実習7日間、および病棟 実習3日間、もしくはオンライン実 習1日と地域探索1日とタッチケア 1日の3日間	学生によかったと思うことと 悪かったと思うことを教員が 尋ねて記述し、その内容を分 析
6	小児看護学領域におけるシミュ レーション教育からの学生の 学び-4疾患の看護事例-	山本裕子, 上山和子, 西村美紗希	2021	新見公立大学 紀要, 42 (2), 107-112.	病棟6日間、保育園実習2日間、 学内カンファレンス2日間	学内でのシミュレーション実習 4疾患の事例の看護過程を展開、 2名で1事例を担当。	学生23名の実習の振り返り シートの記事内容を質的に 分析
7	新型コロナウイルス感染症拡大 化における小児看護学実習の 目標達成に向けた学内・遠隔実 習展開-小児外来でのトリアー ジと継続看護実習を中心-	西田千夏, 合田友美, 林朋博	2021	宝塚大学紀要, 35, 169-176.	小児病棟1週間と 小児外来1週間	小児外来実習の代替として 学内実習と遠隔実習の併用 ロールプレイング	実習での学生の意見を記述 し、その内容を分析
8	小児看護学実習におけるシミュ レーション教育を取り入れた 学内実習での学生の学びと 今後の課題	岡崎草代夏, 武田美奈子, 東海林美幸, 鹿野ひとみ	2022	研究紀要青葉, 13(2), 53-68.	1週目は保育所実習2日間、 外来実習 1日間、学内実習1.5日、 2週目は病棟実習3.5日間、 学内1日間	学内実習 異なる疾患や年齢の3事例のシ ミュレーション。シミュレーションを 10~20分、デブリーフィングを20 分実施。	学生48名の実習記録における 学びの記述をテキストマイニン グで分析
9	オンラインでの小児実習モデル 人形を用いた小児看護学実習 に対する学生の意見	北尾美香, 福井美苗, 植木慎悟, 藤田優一	2022	武庫川女子大学 看護学ジャーナ ル, 7, 41-51.	幼稚園・保育園実習1週間と 病棟実習1週間	オンライン実習1週間 5事例の看護過程を学生1名が 1事例を受け持ち展開する。	学生6名へのインタビューの 内容分析
10	感染禍における外部模擬患者を 招聘することによる学内臨地 実習での教育的効果	能登由美子, 澤田みどり	2022	旭川大学保健福 祉学部研究紀要, 14, 53-58.	記載なし	学内実習 母児を外部模擬患者として招く。	学生3名へのインタビューと 外部模擬患者の母親1名への インタビューを質的に分析
11	遠隔授業による小児看護学 実習の教育実践	入江亘, 菅原明子, 塩飽仁	2022	日本看護研究 学会雑誌, 44(5), 697-706.	病棟実習1週間と保育所2日間 と医療型障害児入所施設実習 (実習期間は記載なし)	オンライン実習5日間 保育所実習の代替として、動画を 用いた子どもの観察演習、子ども の権利に関する課題演習。 病棟実習の代替として、技術演 習、事例ロールプレイ、事例の看 護過程の展開。学生5名で1事例。 医療型障害児入所施設実習の 代替として、視聴覚教材を用いた 演習。	学生29名の授業アンケートの 評価や自由記述の意見の 質的分析

習、1件は母児を外部模擬患者として招いた実習であった。1件は小児外来実習の代替実習で、事例へのトリアージや問診、家族への対応のロールプレイングを中心とした実習であった。

## 2) 小児看護学実習の代替実習での工夫や学生の学び

オンラインや学内での代替実習での工夫に着目し分析した結果、70コードが抽出された。コードの内容を類似性や相違性から比較検討し、7カテゴリ、24サブカテゴリが見出された(表2)。学生の学びに着目し分析した結果、70コードが抽出された。コードの内容を類似性や相違性から比較検討し、6カテゴリ、16サブカテゴリが見出された(表3)。《》はカテゴリ、〈〉はサブカテゴリを示す。

### (1) 小児看護学実習の代替実習での工夫

オンライン実習や学内実習といった代替実習において、学生の学びにつながると学生や教員が捉えていた工夫は、《リアリティの生成》《イメージ化》《自ら学び取る機会の提供》《思考力の醸成》《学生同士の学び合いの活性化》《学びの視点の共有》《行き詰らないための配慮》の7カテゴリからなる。

《リアリティの生成》は、実際には病棟で実習しているわけではないが、まるで本当に子どもや母親や実習指導者に関わっていると学生が感じられるようにリアリティをつくり出すことである。学生に提示する〈事例の時間軸を現実の時間と合わせる〉、学内実習やオンライン実習のシミュレーションで、〈子ども役の人形の外観を変化させる〉、教員が、患児役の人形を動かして子どもの声を代弁する、母親役や実習指導者役を演じ、〈役になりきる〉、実習室やオンラインで〈病棟と同じような場を作る〉、〈臨地実習で遭遇する場面をシミュレーションする〉、〈学生の言動に合わせて子どもの情報を提供する〉、〈変化する子どもや家族の情報を日々提示する〉工夫が含まれていた。教員が演じることで、学生は、家族との関わりや小児病棟の療養環境をイメージでき、

理解を深めていた(木戸ら, 2020; 北尾ら, 2022)。時間経過を設定したシナリオをシミュレーションで使用し、時間軸を現実の時間と合わせることで、入院による子どもの発達への影響や発達段階に応じた退院後の生活を見通した関わりを学生が学ぶことにつながったと教員は感じていた(岡崎ら, 2022)。

教員は、《リアリティの生成》とともに、〈視聴覚教材を用いる〉ことや(東出ら, 2021; 岩佐, 2021; 岡保ら, 2021; 田中ら, 2021; 入江ら, 2022)、〈子どもや家族と関わった経験を想起させる〉ように学生に促すことで(田中ら, 2021)、子どもや家族の状況の《イメージ化》を図っていた。

教員は、教材を提示する際、学生が《自ら学び取る機会の提供》をしていた。例えば、教員は、紙面に記載した情報だけではなく、模擬カルテや視聴覚教材を用いて(入江ら, 2022)、〈学生自身で情報を捉える機会を作る〉ことをしていた。実習目標をふまえ、学習すべき要素を含め事例を準備し(田中ら, 2021)、〈学習すべき要素を含む教材を提示する〉、複数の学生で一事例を受け持つことで〈学生間で役割分担を考える機会を作る〉こともしていた(木戸ら, 2020)。

教員は、学生の《思考力の醸成》に向け、〈子どもの症状や生活について問いかける〉〈学生の理解を深めるため個別指導をする〉〈学生が実践した後十分に振り返る〉ことをしていた。オンライン実習において、学生は、個別指導を受けることで教員に質問がしやすく(岩佐, 2021)、教員と良いコミュニケーションの中で学んでいた(入江ら, 2022)。教員は、臨地実習よりも学内実習のほうが、学生が実施したことを学生と共に振り返る時間を自由に設定でき(木戸ら, 2020)、学生との十分な振り返りができると感じていた。学生と共有できる時間が長いことで、教員は学生の思考に近づいて実習を進めることができたと感じていた(東出ら, 2021)。西田ら(2021)は、学生が自分の実践を十分に振り返ることで、療養環

表2 小児看護学実習の代替実習での工夫

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
リアリティの生成	事例の時間軸を現実の時間に合わせる	時間経過があるシナリオを設定し、時間軸を現実の時間と合わせて合わせることで、入院による発達への影響や発達段階に応じた退院後の生活を見通した関わりにつながったと考えられた(8)
	子ども役の人形の外観を変化させる	子ども役の人形に症状を張り付け(1) 子ども役の人形にテーブを貼り開眼状態を再現(1) モデル人形にモニター、点滴、生検後の圧迫固定などをし、事例のイメージ化を図る(2)
	役になりきる	母親の疲労や不安を教員が演技(1) 指導者役の教員の配置(1) 母親役の教員が学びのポイントとなる発言や臨床で実際にある質問をする(1) 教員が母親役や子どもの声となり、学生が予想しない状況への対応を学ぶようにした(2) 教員が指導者・母・家族の役になり、子ども役のモデル人形を動かして気持ちや声、看護師・母親役や子ども役の人形の反応を教員が行う(6) 教員が母親役となりロールプレイをする(7) 子ども役の人形の動きや声、養護者役を教員が行う(8) 教員が看護師役や親役をし、子ども役の人形を動かす(9)
	病棟と同じような場を作る	病棟環境を子ども役の成長発達に合わせて合わせたものとして準備(1) 病院実習と同じ状況で指導者への行動計画発表を実施できるよう実習室の環境を整える(2) できるだけ実際に近い環境を作る(7) オンライン上に控室・行動計画発表の場・病室という3つの場を設ける(9)
	臨地実習で学生が遭遇する場面をシミュレーションする	臨地実習で学生が遭遇する子ども役との関わりが困難な場面を取り上げてシミュレーションする(8)
	学生の言動に合わせて子どもの情報を提供する	学生の言動に合わせてバイタルサイン測定値や観察した症状について伝える(1) 学生の言動に合わせて観察した症状について伝える(8)
	変化する子どもや家族の情報を日々提示する	入院日数に伴い患児の状態を変化(1) 時間の経過とともに変化すること子ども役の状況についての情報を提示(3) 子どもや家族の状態が日々変化するプログラム(4) 子どもや家族についての経時的な情報を提供し、変化に対応した看護を考えられるようにする(6) 子ども役の状態を日々変化する(8)
	視聴覚教材を用いる	事例と視聴覚教材と運動させ、学生がイメージできるような教材(2) 視聴覚教材により子どもの理解を助ける(3) 小児病棟をイメージできるオリジナルの映像を作成し活用(4) 健康な子ども役の日常生活や入院環境の理解のため、DVDや病棟スタッフのオリエンテーションを撮影したものを使用(5) 子ども役の集団生活を捉えた動画教材を使用(11) 看護師が倫理講義を行っている視聴覚教材を使用(11)
	子どもや家族と関わった経験を想起させる	過去の実習での子どもや家族との関わりを振り返らせる(3)
	学生自身で情報を捉える機会を作る	学生が現在の子ども役をしっかりと観察できるよう、血液データなどは演習後に資料として配布(1) 視聴覚教材により学生個々の視点で患者情報をとらえられるようにする(11) 学生が必要な情報を選択できるように検索ツールを作る(11)
自ら学び取る機会の提供	学習すべき要素を含む教材を提示する	カンファレンスで多職種連携と課題として提示し考えさせる(2) 学生同士学び合えるような異なる発達段階の事例を設定(2) 学習すべき要素を意図した紙面事例を課題として提示(3) 病名や発達段階が異なる子ども役を事例として選定(4)
	学生間で役割分担を考える機会を作る	学生同士役割分担を考えて臨めるプログラム(1)
	子どもの症状や生活について問いかける	学生に子どもの症状について問いかける、観察の必要性を考慮する機会とする(1) 学生に質問する(7)
	学生の理解を深めるため個別指導をする	多職種に目を向けられるよう個別指導時に説明(3) 教員がカンファレンスや個別指導で、子どもの特徴や言動の意味を学生に伝えた(3) 個別指導により理解が深まった(5) 個別指導や丁寧な解説やフォローアップ(11)
	学生が実践した後十分に振り返る	学生と実施したことを振り返る時間を自由にとれる(1) 学生と共有できる時間が多く、学生の思考に近づいて実習を進めることができた(2) 実習と同様の流れで動き、その後学生とデブリーフィングを行う(6) 学生への実践に対して教員から問いかける(7) 学生の対応について振り返る(8) 経緯により学生が自分の言動を振り返る(10)
	意見交換の場を保障する	学生間で話し合う時間が十分に確保(4) 学生の実践と学生間の意見交換の場を保障することで、学生はお互いを認め合い、失敗場面を受け止めて話すことができた(7) 学生が主体的に意見を交わらせるように学生の役割を輪番制にする(8)
	異なる発達段階や疾患の事例を受け持つ学生同士が学びを共有できる場を作る	グループ内で発達段階の違う事例の学びを共有する(2) 他の学生の発表を聴く(5) 他の学生の実践の見学や振り返りを通じ、異なる発達段階の子ども役の関わりを学ぶ(8)
	学生が講義する場を作る	事例の病態講義を学生が実施し学生全員で学びを共有(2)
	学生の意見を可視化する	学生の意見を可視化し学生間で共有する(8)
	意見交換のポイントを伝える	意見交換ではよいところに着目し意見を述べるように伝える(8)
学生の視点の共有	先を見通せるよう学生と学部の視点を共有する	学内実習の評価の視点を示し実習デブリーフィングを明らかにする(2) オンライン実習が臨床実習のどの部分にあたるのかを説明する(11) 授業構成について学生と教員が共有しながら進めた(11)
	教員同士の共通認識を図る	教員同士が事例について共通認識する場を設け指導に備わりが生じないようにした(3)
	リラックスできる場や時間を作る	休憩時間を確保しカメラをオフにする時間を設定(11) 教員が入らず学生同士が話せるオンラインの場を作る(11)
	電話やオンラインで個別に学生の状況を把握する	学生の状況把握に努め、個別指導時以外でも、学生の疑問や質問に答える体制をとる(3) 電話による個別指導で学生が一人で困難を抱えずに学習を進められるようにした(3) 毎日学生とオンラインでつながる時間を確保する(5)
	学生同士が学び合いの活性化	学生間での話し合いの時間を確保する

表3 小児看護学実習の代替実習での学生の学び

サブカテゴリー	コード
成長発達や疾患の理解	子どもの身体的精神的社会的側面も踏まえた成長発達の理解ができていた(2) 子どもの身体的特徴を理解する必要性を学ぶ(3) カンファレンスを通して、ケアするうえで子どもの発達の理解の重要性を学ぶ(3) 次にどうするかを予測するための知識が必要であることに気付く(7) 子どもの発達を捉える重要性を学ぶ(8) 子どもの成長発達や疾患の理解ができてきた(9) 予測できない子どもの言動や表現を体験学習できる(10)
子どもの頑張りの意味づけ	子どもの頑張りを意味づける重要性を学ぶ(3)
子どもの成長発達に合わせた看護	成長発達に合わせた援助の必要性を学ぶ(1) 看護師の関わりが子どもの成長発達の促進につながるかと実感する(2) 子どもの成長発達をふまえた看護の必要性を学ぶ(2) 今後の経過を見据えた援助の重要性を学ぶ(3) 子どもの発達段階に合わせた看護の必要性を学ぶ(3) 子どもの発達を促す重要性を学ぶ(3) 成長発達している子どもに必要な看護の特徴を学ぶ(6) 発達段階に応じた退院後を見通した関わりを学ぶ(8) 子どもの身体的社会的発達の発達を考慮した看護を学ぶ(8) 子どもの成長発達に応じた安楽な環境づくりを学ぶ(8)
子どもとの関係構築方法	子どもへの関わり方に気づく(6) 学生自身がコミュニケーション教育で経験することで、子どもや家族への関わり方を具体的に学ぶ(6) 子どもとのコミュニケーションや信頼関係の構築に遊びを取り入れる必要性を学ぶ(8) 子どもや家族とのコミュニケーションの方法を学ぶ(9)
情報収集	母親から情報を得ることが多いと学ぶ(1) 小児看護における情報収集や観察の特徴を学ぶ(6) 学生が自分で考えて実践しデブリーフィングの中から、観察・判断・視野の広さの重要性を学んだ(7) 情報収集する項目を考えられた(9) 情報収集の大切さに気付く(10)
家族の協力	家族と協力して子どものセルフケア不足に対して支援すること学ぶ(8) 子どもと家族の関係を捉えた支援を学ぶ(8)
家族への看護	母親の精神面への看護の大切さを学ぶ(1) 家族への看護の大切さを学ぶ(2) 教員が家族役となり、不安を抱く家族を演じたことで、家族への看護について学生がイメージができ学びにつながった(2) 家族への看護の必要性を学ぶ(3) 家族看護の視点を持つ(6) 子どもや家族と長くかかわり実際に看護援助をしたことで、家族への支援内容の学びが多かった(6) 育児不安の母親に聞かるとき、看護師として臨むための姿勢についても考えることができていた(7) 子どもだけでなく養護者も看護の対象であると学ぶ(8) 子どもと家族を看護する必要性を学ぶ(9) 家族への看護も含めて考える(10)
安全安楽を守る看護	病室環境の整備の大切さを学ぶ(1) 危険を予測して関わることの大切さを学ぶ(2) 子どもにとって入院や治療がつかない経験ならぬ関わりが大切と学ぶ(2) 子どもの苦痛を緩和する工夫を学ぶ(3) 学生がシミュレーションで経験することで、処置やケアの援助技術を具体的に学ぶ(6) 小児外来の場を安心できる場にする必要性に気付く(7) 子どもや家族の不安や恐怖の軽減にむけた関わりを学ぶ(8)
多職種連携	子どもの安全安楽をふまえたバイタルサイン測定の特徴を学ぶ(8) 子どもの安全安楽を守る看護を学ぶ(8)
子どもへの倫理的配慮	カンファレンスでの教員からの学生への発問で学生の多職種連携についての学びにつながった(2)
看護に責任を持つ大切さ	子どもを尊重した看護の必要性を学ぶ(1) 子どもの病氣や治療への思いを聴いてから支援する子どもへの思いに立つ看護実践の重要性を学ぶ(3) 自分の思いを言葉で表現することが難しい子どもへの意思の尊重する関わりを学ぶ(8)
子どもの療養環境	責任を持ちかわることで看護に責任を持つ重要性を学ぶ(3) 看護師が子どもの看護に責任を持つ大切さを学ぶ(1) 声掛けの仕方が子どもへの行動や心理面にも影響を与えることを理解する(2)
チームワーク	映像を見ることで小児病棟や入院環境の理解が深まった(6) 学生は自分が実践する機会を得て安心した環境の下で十分な振り返りができたことから、療養環境や他職種連携の重要性に視野を広げることができたと考える(7) 小児病棟の療養環境をイメージできた(9)
看護過程	学生同士の役割分担の必要性を学ぶ(1) 事例を共有することで、看護の答えが一つではないことへの気づきや教え合い学び合う力が培われる(2) 時間をかけて学習し看護過程に対する理解が深まった(3)
臨地実習と遜色ない学び	子どもの特徴や子ども独自のケア方法といった小児看護学実習で学習すべき要素を学んでいた(3) オンライン実習という実習形態が異なっても臨地実習と同等の評価であった(4) 実習目標を達成できた(5) 臨地実習と同様にグループワークをいかにさせた(9) 実際に子どもにも気づかせなかったこと以外は従来の実習と同じことを学べた(11)

境や多職種連携の重要性まで学生の視野が広がったと考えていた。

教員は、《学生同士の学び合いの活性化》につながる工夫を行っていた。教員は、カンファレンスや学生同士で話し合う時間を設定し、《意見交換の場を保障する》《異なる発達段階や疾患の事例を受け持つ学生同士が学びを共有できる場を作る》《学生が講義する場を作る》ことをしていた。学生同士の意見交換が活発になるよう、《学生の意見を可視化する》《意見交換のポイントを伝える》こともしていた。学生は、実習グループメンバーとオンラインで話し合い、他の学生の考えを聴く機会が多くあり、他の学生の発表を見て、他の学生から学ぶことができると感じていた（岩佐，2021；入江ら，2022）。

教員は、学生が授業展開の意図をくみ取れるように、代替実習と臨地実習とのつながりを説明し（入江ら，2022）、《先を見通せるよう学生と学びの視点を共有する》ことをしていた。また、教員は、指導に偏りを生じないため《教員同士の共通認識を図る》ようにし、《学びの視点の共有》をしていた。

オンライン実習において、教員は、学生同士が話し合えるオンラインの場を作り、休憩を適度に確保し（入江ら，2022）、《リラックスできる場や時間を作る》工夫をしていた。また、《電話やオンラインで個別に学生の状況を把握する》ことで、学生が一人で《行き詰らないための配慮》をしていた。

## (2) 代替実習を通しての学生の学び

オンラインや学内での代替実習での学生の学びは、《子どもの成長発達や疾患をふまえた看護》《子どもへの倫理的配慮》《子どもの療養環境》《チームワーク》《看護過程》《臨地実習と遜色ない学び》の6カテゴリーからなる。

《子どもの成長発達や疾患をふまえた看護》では、学生は、子どもの《成長発達や疾患の理解》をし（東出ら，2021；田中ら，2021；北尾ら，2022；能登ら，2022）、看護師の関わりが子ども

の成長発達の促進につながると実感し（東出ら，2021）、《子どもの頑張りの意味づけ》の重要性や、《子どもの成長発達に合わせた看護》を学んでいた（田中ら，2021；山本ら，2021；岡崎ら，2022）。学生は、他の学生の患児とのシミュレーションの見学やカンファレンスを通して、異なる疾患や発達段階の患児との関わりを学んでいた（東出ら，2021；岡崎ら，2022）。北尾ら（2022）は、モデル人形を教員が動かし発言し、模擬患児が反応したことから、モデル人形であっても患児をイメージすることができ、子どもの成長発達や疾患の理解につながったと考えていた。

学生は、子どもや家族とのコミュニケーションの方法（山本ら，2021；北尾ら，2022）や子どもとのコミュニケーションや信頼関係の構築に遊びを取り入れる必要性（岡崎ら，2022）というように、《子どもとの関係構築方法》について学んでいた。学生は、小児看護の《情報収集》の特徴や大切さも学んでいた。山本ら（2022）は、学生が主体となって実施する時間が臨地実習と比べて長いことが、《情報収集》の学びにつながったと考えていた。能登ら（2022）は、母子の外部模擬患者とのリアリティのある実習により十分な情報収集の大切さに気付く機会となるが、外部模擬患者との対面後には、教員などによる十分な振り返り学習の必要性を指摘していた。学生は、情報収集や援助場面で、《家族の協力》を得ることの必要性（岡崎ら，2022）を学んでいた。さらに、学生は、子どもだけではなく家族も看護の対象であること（東出ら，2021；西田ら，2021；田中ら，2021；山本ら，2021；北尾ら，2022；能登ら，2022；岡崎ら，2022）、《家族への看護》の大切さを学んでいた。学生は、カンファレンスでの話し合いをもとに、家族への具体的な支援の必要性を学んでいた（田中ら，2021）。教員は、バイタルサイン測定実施などのシミュレーションで、不安を抱く家族の状況などを演じ、学生のイメージ化や学びにつなげていた（木戸ら，2020；東出ら，2021）。教員は、臨地実習と比較し学生が患児や家族と関われ

る時間が長く、実際に看護援助を行ったことが家族看護の視点を持つことにつながったと考えていた(山本ら, 2022; 岡崎ら, 2022)。

学生は、危険を予測して関わることの大切さ(東出ら, 2021)、子どもの苦痛を緩和する工夫(田中ら, 2021)、子どもや家族の不安や恐怖の軽減に向けた関わり(岡崎ら, 2022)、小児外来の場を安心できる場にすること(西田ら, 2021)、安全安楽を踏まえたバイタルサイン測定の技術(岡崎ら, 2022)といった<安全安楽を守る看護>を学んでいた。岡崎ら(2022)は、カンファレンスで学生の対応を振り返ったことで、<安全安楽を守る看護>の学びにつながったと考えていた。また、カンファレンスで教員から多職種連携に関する議題を提示し、学生に考えさせることで、<多職種連携>の学びにつながったと教員は捉えていた(東出ら, 2021)。

学生は、子どもは自分の思いを言葉で表現することが難しいこともあるが、子どもの病気や治療への思いを聴いてから支援するという、<子どもの意思を尊重する看護>の重要性も学んでいた(田中ら, 2021; 岡崎ら, 2022)。学生は、自分の実施した<看護に責任を持つ大切さ>をカンファレンスの話し合いを通し学んでいた(田中ら, 2021)。そのように、学生は、カンファレンスで、子どもへの対応を振り返り(岡崎ら, 2022)、他の学生らと話し合う中で(田中ら, 2021)、《子どもへの倫理的配慮》の学びを深めていた。

視聴覚教材を用いることや実践後の振り返りを通して、学生は、《子どもの療養環境》について学んでいた(岩佐, 2021; 西田ら, 2021; 北尾ら, 2022)。学生は、シミュレーションやカンファレンスを通し、<グループ内の役割分担>や<学び合う力>といった《チームワーク》を学んでいた(木戸ら, 2020; 東出ら, 2021)。学内実習で時間をかけて学習することで、《看護過程》に対する学生の理解は深まっていた(田中ら, 2021)。教員は、オンライン実習でも、子どもと実際会えなかったこと以外は、《臨地実習と遜色ない学び》

を得られたと捉えていた(岩佐, 2021; 岡保ら, 2021; 田中ら, 2021; 入江ら, 2022)。

## V. 考察

コロナ禍で小児看護学実習がオンラインや学内実習という代替実習であっても、学びにつながる様々な工夫がされており、学生は多くの学びを得て、臨地実習と遜色ない学びであると教員が感じていたことが明らかとなった。今回明らかとなった学びにつながる工夫をもとに、小児看護学実習の代替実習での学生の学びを深めるため教員に求められることや今後の課題について考察する。

### 1. 代替実習での学生の学びを深めるため教員に求められること

代替実習での学生の学びにつながる工夫として、リアリティの生成にあたるコードが最も多く抽出された。実習室を病室に見立て、教員が、母親や指導者の役となり、人形の子ども役の声や動きを行うことで、学生は、リアリティを感じていた。学生がリアリティを感じられるようにするには、教員は、小児病棟の状況や入院する子どもや家族のことをよく理解していることが不可欠である。そのうえで、学習すべき要素を含む事例を設定し、シミュレーションにおいては、実習で遭遇する場面を想起しながら、学生の言動に対する子どもや家族の反応を演じる必要がある。

教員は、子どもや小児病棟を学生がイメージしやすくなるよう、視聴覚教材を用いていた。教員は、学生間で子どもの発達や疾患に関する学びが深まるように、あらかじめ多様な疾患や年齢の子どもの事例を学生に受け持たせるよう準備をしていた。また、教員は、模擬カルテや視聴覚教材から学生自ら情報を捉える機会や、学生間での役割分担を考える機会を作るよう工夫していた。そのような関わりを教員が行うためには、教員の教材作成や活用に関する教育力とともに、代替実習の準備時間の確保が必要である。

学生は、オンラインや学内実習ではあるが、子どもの成長発達や疾患をふまえた看護や子どもの意思を尊重した看護の重要性を学んでいた。子どもの気持ちを尊重した看護を実践するための教育的支援として、教員は、学生が自分自身の言葉で体験を語る機会を提供し、他者心理の理解を通して自己理解を促す必要がある（吉岡ら, 2021）。今回の分析対象とした文献においても、カンファレンスでの話し合い、学生の対応の振り返りにより学びにつながっていることが示されていた。教員と学生との振り返りや、カンファレンスで学生が自らの対応を振り返り、他の学生と話し合うことが、学生自身の言葉で体験を語る機会となっていたと考える。臨地実習では他の学生の実践を目にすることは難しいが、学内実習やオンライン実習では、学生が他の学生の実践を見ることは比較的容易である。他の学生の実践を見たうえで意見交換ができると、実践の詳細な部分についても意見交換が可能となり、学生同士の学び合いが活性化されると考える。学生がお互いの実践を見たうえで振り返り、意見交換することができる場を作ることや問いかけを行うことが教員には求められる。

学生は、看護過程の学びについて、学内実習で時間をかけたため理解が深まったことをあげていた。小児看護学実習は、実習施設の確保が難しく、病棟での実習期間が徐々に短縮している。また、子どもの入院期間も短いことが多い。短期間の実習での子どもとの関わりの中で、学生は学ぶことが多く、そのスピードに追いつくことに必死にならざるを得ない状況である。臨地での短期間実習における困難として、児の情報収集を満足に行えないことがあり、教員は、学生個々の能力に合わせた情報提供を行い補完している（山本ら, 2018）。代替実習では、時間の融通が利き、学生個々の学びのペースに合わせる事が臨地実習よりも比較的容易である。しかしながら、オンライン実習では、学生と直接会うことができないため学生個々の状況を把握しづらく、学生のペースに合わ

せることは難しい。教員は、電話やオンラインで学生の状況を把握し、学生の学びのペースに合わせて、実習目標に到達できるよう、個別に支援するとともに学生同士の学び合いを活性化できるように関わる必要がある。

## 2. 今後の課題

小児看護学実習の代替実習での学生の学びを、教員は、臨地実習と遜色ない学びと捉えていた。大森（2022）は、コロナ禍における看護学生の臨地実習の代替実習に関する文献検討を行い、臨地実習で学ぶことが必要な内容として、「患者との人間関係の構築」と「ケアの提供を通じた振り返り」であることが示唆されたと報告している。今回の分析対象とした文献において、学生は、人形や外部模擬患者とではあるが、子どもとの関わり方やコミュニケーションの方法、信頼関係を構築するうえで遊びを取り入れる必要性といった子どもとの関係構築方法を学んでいたことが報告されていた。子どもとの真の関係構築ではないが、教育方法を工夫することで、「患者との人間関係構築」という臨地実習での学びに近づけることが可能であることを示唆している。

教員は、小児看護学実習の代替実習において、学生が実践した後に十分に振り返るという工夫を行っていた。大森（2022）が臨地実習で学ぶことが必要として挙げた「ケアの提供を通じた振り返り」に近似すると考えられる。このように、代替実習では、教員の工夫により臨地実習に近い学びを得ることができる。しかし、代替実習での実践における子どもや母親の反応は、教員の想定範囲に限定されたものである。

普段子どもと接する機会が少ない学生にとって、子どもの反応を予測することは難しい。看護師の実践の観察や教員や看護師からの助言は、学生の気づきにつながり（乗越, 2020）、臨床判断に必要な思考方法の獲得に影響する（岡田, 2020）。それらのことから、臨地実習において、日々、看護師の実践やその時の子どもの反応を観

察することや、看護師から指導を受けることは、代替実習において教員から指導を受けるのみよりも、学生の気づきや臨床判断に必要な思考方法の獲得につながりやすいと考えられる。代替実習において、臨地の看護師の実践を観る、看護師から実践の振り返りにおいて助言を得る機会を作るなど、臨地の看護師の協力により学生の学びが深まると考えられる。今回の分析対象とした文献においては、臨地の看護師の協力について記載したものはなかった。今後、代替実習が様々な教育機関で行われる中で、臨地の看護師にどのように協力を得ることが学生の学びを深めるのかについての研究が望まれる。

## VI. 結論

11文献を対象とし、コロナ禍における小児看護学実習の代替実習での工夫や学生の学びについて文献検討を行い、代替実習でも、学生は、子どもの成長発達や疾患をふまえた看護、子どもへの倫理的配慮、子どもの療養環境、チームワーク、看護過程を学んでおり、学生は臨地実習と遜色ない多くの学びを得ていたと教員が認識していたことが明らかとなった。また、代替実習での学生の学びが深まるよう、学生がリアリティを感じられるような工夫、視聴覚教材や経験の想起によるイメージ化、学生が自ら学び取る機会の提供、振り返りや問いかけや個別指導による思考力の醸成、学生同士の学び合いの活性化、学生や教員同士の学びの視点の共有、学生が行き詰まらないための配慮といった工夫がなされていることも明らかとなった。

教員は、代替実習において、臨地で実習しているかのようなリアリティを作り出し、学生が行き詰まらないよう配慮しながら、実習目標に到達できるよう、個別に支援するとともに、学生同士の学び合いを活性化できるように関わる必要がある。

## 利益相反

本研究は、開示すべき利益相反関連事項はない。

## 文献

- 秋田由美, 高橋泉, 弓気田美香他. (2019). 小児病棟以外での小児看護学実習に関する文献研究. 駒沢女子大学研究紀要, 2, 105-114.
- 東出郁子, 西澤恵美子, 原恭子他. (2021). 新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う学内実習の効果と課題－小児看護学実習－. 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 13, 64-69.
- 入江亘, 菅原明子, 塩飽仁. (2022). 遠隔授業による小児看護学実習の教育実践. 日本看護研究学会雑誌, 44 (5), 697-706.
- 岩佐有子. (2021). コロナ禍における小児看護学実習の成果と課題. 京都看護, 5, 67-75.
- 木戸美佐子, 真田英子. (2020). シミュレーション演習を交えた臨地実習の教育的意義－2020年度小児看護学実習を終えて－. 群馬医療福祉大学紀要, 9, 97-104.
- 北尾美香, 福井美苗, 植木慎悟他. (2022). オンラインでの小児実習モデル人形を用いた小児看護学実習に対する学生の意見. 武庫川女子大学看護学ジャーナル, 7, 41-51.
- 厚生労働省. (2015). 母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について. 2022年10月20日アクセス, [https://www.ajha.or.jp/topics/admininfo/pdf/2015/150908\\_8.pdf](https://www.ajha.or.jp/topics/admininfo/pdf/2015/150908_8.pdf)
- 日本看護系大学協議会. (2021). 2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査 A調査・B調査報告書 <https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyousaAB.pdf>
- 西田千夏, 合田友美, 林朋博. (2021). 新型コロナウイルス感染症拡大化における小児看護学実習の目標達成に向けた学内・遠隔実習展開－小児外来でのトリアージと継続看護実習を中

- 心に－. 宝塚大学紀要, 35, 169-176.
- 乗越千枝. (2020). 臨地実習における看護学生の  
気づきに関する文献検討. 梅花女子大学看護  
保健学部紀要, 10, 40-49.
- 能登由美子, 澤田みどり. (2022). 感染禍におけ  
る外部模擬患者を招聘することによる学内臨  
地実習での教育的効果. 旭川大学保健福祉学  
部研究紀要, 14, 53-58.
- 岡田摩理. (2020). 領域別看護学実習の経験の積  
み重ねにより臨床判断に必要な思考方法を学  
生が獲得していくプロセス. 日本看護学教育  
学会誌, 29 (3), 1-13.
- 岡保由美子, 柳下圭代, 角田はる美. (2021). オン  
ライン小児看護学実習における実習指導の現  
状と課題withCOVID-19: 授業評価スケール  
を用いた遠隔実習の予備的調査. 白鳳短期大  
学研究紀要, 16, 101-112.
- 岡崎草代夏, 武田美奈子, 東海林美幸他. (2022).  
小児看護学実習におけるシミュレーション教  
育を取り入れた学内実習での学生の学びと今  
後の課題. 研究紀要青葉, 13 (2), 53-68.
- 大森美保. (2022). コロナ禍における看護学生の  
臨地実習の代替実習に関する文献検討. 帝京  
科学大学紀要, 18, 157-164.
- 田中さおり, 伊織光恵, 日沼千尋. (2021). 学内実  
習プログラムで実施した小児看護学実習にお  
ける学生の学び. 天使大学紀要, 21 (2), 15-31.
- 山本裕子, 上山和子. (2018). 小児看護学実習の困  
難とその対策に関する文献検討. 新見公立大  
学紀要, 39, 163-169.
- 山本裕子, 上山和子, 西村美紗希. (2021). 小児看  
護学領域におけるシミュレーション教育から  
の学生の学び－4疾患の看護事例－. 新見公  
立大学紀要, 42 (2), 107-112.
- 山内朋子, 川名るり, 筒井真由美他. (2017). 看護  
系大学小児看護学実習フィールドの現状と今  
後の研究課題に関する文献検討. 日本小児看  
護学会誌, 26, 84-90.
- 吉岡詠美, 金子さゆり. (2021). 小児看護学実習に  
おける子どもの気持ちを尊重した看護の因  
子構造とその関連要因. 日本看護福祉学会誌,  
26 (6), 39-44.